■売茶翁(高遊外)　　在家黄檗僧の畸人。すべてからの自由を求め，茶を売りながら放浪する仏道全う，京の若者に多大の影響。
ばいさおう
談林派俳諧・1675＝　　肥前国佐賀藩の城下町蓮池支藩で，初代藩主鍋島直澄に医者として仕える柴山杢之進常名の三男に生まれる。母は草川みや。幼名菊泉。

徳川綱吉将軍1680＝ 5歳：
教養ある家庭で育ち，幼時より，卓越した秀才ぶりを示す。

八百屋お七・1683＝ 8歳：2代藩主の長男が死去したため，**_萬福寺で隠元からも直接教えを受けた化霖道龍を開山に黄檗宗の末寺として建立された龍津寺に入り，**
堀田正俊暗殺1684＝ **9歳：**
出世景清初演1685＝10歳：**_住職化霖道龍について得度，僧月海元昭となる。**
・・・・・・1686＝11歳：**_化霖が師で，隠元渡来時に随行してきた中国僧独湛性螢の還暦を祝う茶会に出席するため，宇治萬福寺に向かうのに随い，まもなく経典読誦を許された上，独湛から特別に偈頌を与えられる。この京都滞在中，高山寺を初めて訪れ，茶畑を見て，開山の明恵が栄西から貰い受けた茶の種子を，日本で初めて植えた地であることに強い印象を受ける。**

奥の細道・・1693＝**18歳：**

生類憐令頂点1695＝20歳：
荻原勘定奉行1696＝21歳：親族の多い奥州の仙台を目的地に**_行脚に出，江戸をめざす途中，独湛を表敬訪問し，高山寺に参詣，**
・・・・・・1697＝22歳：江戸を発し，磐城三春の伯父草川次綱を訪ね，**_仙台に到着。安養寺の月耕道稔の室に入り，僧堂に掛錫。**

この間，**_黄檗僧でもあった月耕のもとで修行，大乗仏教の律学も学んだと考えられる。**

松の廊下事件1701＝26歳：月耕が示寂したためか，安養寺を離れる。龍津寺へ復路の途中，臨済曹洞二宗の書徳に歴参，また**_近江安養寺住職で，黄檗宗の高僧鉄眼道光から真言律を伝授されていた湛堂慧淑に律学を学び，**
赤穂浪士討入1702＝**27歳：**龍津寺に帰着，
赤穂浪士切腹1703＝28歳：化霖七十の寿の答礼のための宇治萬福寺参詣に随行，この時も，高山寺を参詣。化霖が知己の画家・書家・学者らを訪ねるのに従って，大きな刺激を得，化霖が帰った後も**_萬福寺に滞留して，禅堂での修行，**
同時期，弟弟子で友人の大潮元皓も萬福寺に滞在している。
富士宝永噴火1707＝32歳：**_修行を終えて，龍津寺に戻る。以後，化霖に侍して，寺務にたずさわる。**

徳川綱吉没・1709＝34歳：

冥途の飛脚・1711＝**36歳：**

徳川吉宗将軍1716＝41歳：佐賀の雷山(背振山)に登って，苦行の夏安居(げあんご)を九十日間したりするも，なお開眼できず，
隅田川の桜・1717＝42歳：この年，化霖和尚が，月海の将来を予測するように，常識を超えた人物と指摘。
洋書輸入解禁1720＝**45歳：_師化霖が死去するも，生来の謙虚さから，また，自由を求める性向から，後継を固辞していて，**
小石川薬園・1721＝46歳：既に大学者になっていた大潮元皓に書状を送り，龍津寺の住持として戻るよう説得，
・・・・・・1722＝47歳：大潮元皓に再び説得の書状を送り，大潮元皓は龍津寺に戻って，「化霖和尚行業記」も著す。
火の見櫓制・1723＝48歳：**_母みやが死去し，大潮元皓が龍津寺住持を継ぐことを見届けると，**
近松没・・・1724＝49歳：***残りの人生は住処を定めず放浪して暮らそうと決意，龍津寺を去って，京都に向けて旅立つ。**
以後，十年間は消息不明，
一方，大潮元皓も龍津寺に留まらずに，各地を訪問すべく，留守役に鏡宗を置いていたが，
・・・・・・1727＝52歳：鏡宗が死去すると，大潮元皓は住持を辞し，
梅岩心学始・1729＝**54歳：**龍津寺住持は，紫石浄介になった。
この間，大坂天王寺の観性尼の小祇庵に滞在したという説もあるが，
享保大飢饉・1732＝57歳：
漂泊の暮らしが難しいらしく，
・・・・・・1734＝59歳：佐賀蓮池藩主の弟鍋島之淳に書状を送る。***鴨川のほとりに小さな庵を借り，二ノ橋に茶店{通仙亭}を営むとともに，〝売茶翁〟の号をもちいて，東山の景勝地など移動しながら，茶を売って暮らす。**
昆陽蕃諸考・1735＝60歳：この頃，**_自らの決意を語った「対客言志」を書いたが，売茶を退廃した布施に代わるものとしている。**
・・・・・・1736＝61歳：この年，大潮元皓が，日本人僧の列席が許されない萬福寺で，唯一人，監守とういう上席の役目につく。
・・・・・・1738＝**63歳：**この頃，盧同の有名な茶歌をふまえて，近江の越渓茶を歌う最も長い漢詩を制作，
ﾛｼｱ船出没始 1739＝64歳：三十三間堂と大仏殿の間に茶店を移す。この前後，茶についての漢詩も多数詠んでいる。
_一流の文化人ながら超越した自由な生き方で，やはり畸人の亀田窮楽と長く頻繁に交流したほか，京の詩人(六如)や画家(大雅・若冲)たちに，強く影響を与えて行くとともに，教団体制を拒むものとなり，
・・・・・・1740＝65歳：まだ10代の池大雅が「売茶翁松樹下で茶を売る」という絵を描いている。
・・・・・・1741＝66歳：草川玄道に長文の書状を送る。10年に1度という掟に従って肥前蓮池に帰郷し，龍津寺で大潮と再会。大坂屋敷詰めの立場で藩主に暇乞い。***僧の身分を捨て，一介の俗人に戻り，〝高遊外〟〝遊外居士〟と号する。**
公事方御定書1742＝67歳：京都に戻り，宇治湯屋谷に革命的な煎茶製法を開発した永谷宗円を訪問，求めに応じて一文を書く。
・・・・・・1743＝68歳：双ヶ丘に移住。梅雨が続いて売茶できず困窮，亀田窮楽自らが米と銭を届けてくれて救われる。
梅岩没・・・1744＝69歳：この頃，相国寺に移って，子院で紀貫之邸宅跡の林光院に住み，奨僧大用・無住が侍してくれる。
徳川吉宗隠居1745＝70歳：慈雲庵にいたまだ20代の大典顕常と親交，ともに宇野明霞(士新)を弔う。画家彰城百川が来訪し，合作。この頃，漢詩の代表作「自賛三首」。大典顕常命名による若冲とも親交が始まる。
義経千本桜・1747＝**72歳：**大典顕常らと，糺の森で詩作。余命を意識したのか，この頃から，**_後輩たちを禅師として指導し始める。**
忠臣蔵・・・1748＝73歳：高山寺密弁の依頼で，高山寺を訪れたことが生き方の契機になったと，唯一の著作「梅山種茶譜」を成す。
・・・・・・1750＝75歳：嵯峨臨川寺で営まれた夢窓国師四五〇回忌に参列。
徳川吉宗没・1751＝76歳：
・・・・・・1752＝77歳：妹およしに江州茶を送り，化霖の三十三回忌に供えさせる。この頃，観性尼に諭すような詩偈を贈る。
山脇東洋解剖1754＝79歳：八十歳の寿を祝って，(おそらく篆刻家高芙蓉から)三穎一組の印，大潮，大典，紫石らから詩偶を贈られる。10年住んだ相国寺林光院から。聖護院村の借宅に移住(侍者として大用・無住が同行か)。
自然真営道・1755＝80歳：「梅山種茶譜」出版。独湛の五十回忌に漢詩をつくる。この頃，池大雅による「売茶翁像」。**_腰痛が悪化して，戸外売りが困難になると，長年愛用の茶道具が他人の手に渡らぬよう，一切を焼却。窮乏するも悠然，**
・・・・・・1756＝**81歳：**無住と大用に行脚を励ます偈を贈り，以後，独居。**_ウソのように腰痛が治り，生活の糧にと，求めに応じて多くの書をものするようになる。**
源内物産会・1757＝82歳：相国寺の慈雲庵(院)を訪れる。大聖宮より綿子を贈られる。若冲の水墨画「売茶翁像」，
宝暦事件・・1758＝83歳：およし宛ての最後の書状を書く。二，三人と吉田山の真如堂で紅葉を愛でる。
大岡忠光没・1760＝85歳：伊藤若沖の「動植練絵」に一行書を献呈，若冲はそれを篆刻してもらい，落款に使うようになる。
・・・・・・1763＝88歳：最後の偈をものした後，***衰弱が進み，友人らがまとめ，見返しに若冲による肖像版画，巻頭に大典顕常による「売茶翁伝」が置かれた「売茶翁偈語」を贈られてまもなく，没した。**
没後を含め，若冲を筆頭に，大雅ら，最も多くの画家によって肖像画が描かれた人物としても知られる。
ノーマン・ワデル「売茶翁の生涯」，